

慶應義塾大学の取り組み

山下一夫(慶應義塾大学)

潮田央・佐々木亮太(神奈川県立藤沢総合高等学校)

温悠・池谷尚美(横浜市立みなと総合高等学校)

1. はじめに(プロジェクトとしての取り組み)

慶應義塾大学外国語教育研究センターでは、令和3年度に「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」を実施した。同事業には、高校と大学の様々な言語の担当者が集まり、個別言語の枠を超え、外国語教育の普遍的な目標と方法が志向された。

事業の柱は、学習指導要領の分析と検証を行うことで、「英語以外の外国語教育」を中等教育の文脈に明示的に位置づけ、「複言語主義による豊かな外国語教育の実現」を目指す、というものである。具体的には以下の3点を実施した。(1)改訂を行ってきた、慶應事業独自の「単元指導案フォーマット」の再修正。(2)公開授業を実施し、メンバーで授業見学を行って、理論や方法について検証。(3)ワークショップ「多様な外国語教育に取り組む教師向けワークショップ—来年度の授業計画を立ててみよう—」の実施。事業の成果については、センター発行の学術誌やWebでの公開を予定している。

今回の発表では、研究担当者が複数いる2つの学校において、言語を超えた連携がどのように行われたかについて紹介する。

2. 実践報告

(1) 神奈川県立藤沢総合高等学校の実践(中国語、スペイン語)

発表者二人は令和3年度に「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」に研究担当者として参加した。プロジェクト参加以前から、行事や進路指導の場面で両者が協力して指導する場面があったが、今年度はプロジェクトで学んだことをもとに授業の相談をすることが増えた。

相談の結果、それぞれが実践していた言語活動を互いに参考にするようになった。また、GoogleClassroomやGoogleFormsを活用した授業方法や振り返りを互いに取り入れた。県立高校ではそれぞれの言語の担当者は一校に多く望めないが、今年は言語の枠を超えて協力することで授業を改善することができた。

テキスト内容や活動について情報交換する中で、年間の目標や指導計画、活動に多くの共通点があることに気付いた。また、両者の授業で同じ活動をしていたり、履修している生徒が重なり合っていたり、生徒が同じような感想を持ったりしていることがわかった。具体的な実践内容を報告するとともに、本校の生徒の感想を報告する。

(2)「横浜市立みなと総合高等学校の実践(中国語、ドイツ語)」

発表者らは、担当している中国語・ドイツ語クラスを連携させて生徒同士がお互いに教え、学び合う授業を実践した。まず、挨拶・自己紹介・中国やドイツの食べ物・自分が好きな事などをお互いの学習言語で紹介するポスターを共同で作成した。その後、ドイツ語のクラスで、フランス語履修者の協力も得て、中国・フランスの時間割や学校生活について、各言語履修者から情報を送ってもらい、それをドイツ語で話す様子をビデオに撮影した。その動画は中国語・フランス語履修者にも送られ、それぞれの言語学習者とコメントのやり取りを行った。さらに中国語クラスでも、中国語でドイツの時間割を中国語に訳し、中国語でドイツの時間割を話す動画を作成した。

本発表では、異なる言語を学ぶクラスでの協同作業の具体的な活動と生徒たちの感想、今回のプロジェクトを実施するうえでの指導の工夫についても紹介する。

以上